



故武田京一教授の御逝去を悼む

日本の気象学会で指導的役割をつとめてこられた武田京一教授の訃報は、我々学会員にとって大きな衝撃であった。武田教授は1970年1月胃潰瘍で入院、手術され、アメリカにも出張できる程に回復されたが、癌に転移のおそれがあり、1971年7月入院再手術、病巣除去され経過良好で9月退院、10月から出勤、研究のまとめにかかられた。1972年1月18日三回目の入院加療中、肺炎の併発もあり、夫人の献身的な御看護の甲斐もなく、1972年2月21日に逝去された。享年63歳、誠に遺憾なことであった。

武田教授は1908年7月28日、東京に生れ、旧制第4高等学校を経て東京帝国大学理学部物理学科を1932年に卒業、陸軍科学研究所勤務を経て、1937年には陸軍技師として第6陸軍技術研究所、更に1939年には陸軍気象部員を兼任され、終戦まで軍用気象特に地面付近の気象の調査研究に没頭された。戦後1945年から1947年までは中央気象台産業気象課で産業気象の調査研究を行ない、続いて1947年から1952年までは林業試験場気象研究室長として、森林気象の研究に従事し、さらに1952年12月九州大学教授に任ぜられ1972年までの約20年間は九大農学部、農業気象学講座の担当者として農業気象学および気象学の研究に専念すると同時に、教育にも尽力された。学外にあっては日本気象学会理事、日本農業気象学会九州支部長、同学会長、同顧問を歴任し、一貫してわが国の気象学および農業気象学の発展に努力された。

武田教授の研究面は微細気象学に関するものと水文学に関するものに大別できる。

微細気象学では1949～1952年に気象集誌に発表された「大気乱流に関する研究」が著名であり、これは地面付近の風速、気温の垂直分布、その安定度に対する関係を主として実験により調べたものであるが、当時は気象観測はなるべく地物の影響を受ける気象要素の平均値を求めることに主力が注がれていたから変動に

関する研究は極めて少なく、わが国の先駆的研究ともいえるものであった。その後諸外国およびわが国において多くの詳細な観測結果が得られるようになったとはいえ、地面粗度（Z₀）および風速、風向の頻度分布の安定度に対する関係などは、当時得られた結果に比してそれ程変わっていない。また「粗度パラメーターと零面変位について」においては理論的に植物群落地の上部および内部の風速を初めて統一的に取り扱ったもので、従来極めて不十分にしか考えられていなかった粗面が粗、滑の他に疎、濃の粗面に分類されることが明らかにされ、任意の粗面が2つのパラメーターで識別できる粗面ダイヤグラムが作成された。

水文学関係では、先ず人工降雨の研究で、九州地方は干ばつが多いのでその対策ということもあった。昭和27年寺田一彦教授のあとを継がれるときは人工降雨が継続研究であった。気球法、地上発生法、航空機法など、各種の散布方法の開発と九州電力、科学技術庁、防衛庁、気象研究所など積極的な援助もあり、レーダーと P₂V7 機を使用することができたので、従来漠然としか示すことができなかった人工降雨の効果を極めて判然と示された。

それらは J.A.M. 誌、国際雲物理学学会報告、アメリカ気象学会の第1回気象制御会議報告などに発表され諸外国により注目されている。

集中豪雨関係では、その実体および機構に関する研究をレーダーで行ない、豪雨が発生するには強い上昇気流が必要なこと、従って雲は高所まで発達すること、その風下に強雨域が発生することを結論し観測できた。また「林地雨量について」は樹冠保持量、林内滴下量、樹幹流量と林外雨量との関係を理論的に解明し、また山地雨量を理論的に論じたり、「体感気候と不快指数」においては風の入った理論的根拠のある新しい方法を唱えるなどして気象学とその応用について極めて幅広い研究活動を行なった。

武田教授は寡黙でありながら多くの人に心から敬愛された。まだまだ今後の学界での活躍が期待されていただけに、その急逝は惜まれる。

ここに心から哀悼の意を表する。

坂 上 務（九州大学農学部）